

# 戸津9号窯

—構造改善事業に伴なう発掘調査概報—

小松市文化財調査報告

第5輯

1980・3

小松市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、構造改善事業の実施に伴ない、小松市教育委員会が、北陸大谷高等学校地歴クラブの協力を得て実施した発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査期日 着手 昭和50年7月7日  
完了 " 8月11日
- 3 調査員 上野与一 北陸大谷高等学校教諭  
岡下 標 " "  
小村 茂 小松市教育委員会社会教育課主事  
宮下幸夫 "
- 4 本書の写真撮影、図版作成、原稿執筆、編集は宮下幸夫があたった。

# 戸津9号窯

## I 位置と環境

本古窯跡は、小松市戸津町ヨ32番地、通称「六字ヶ丘」と呼ばれ、上田喜義氏所有の果樹園内に所在する。

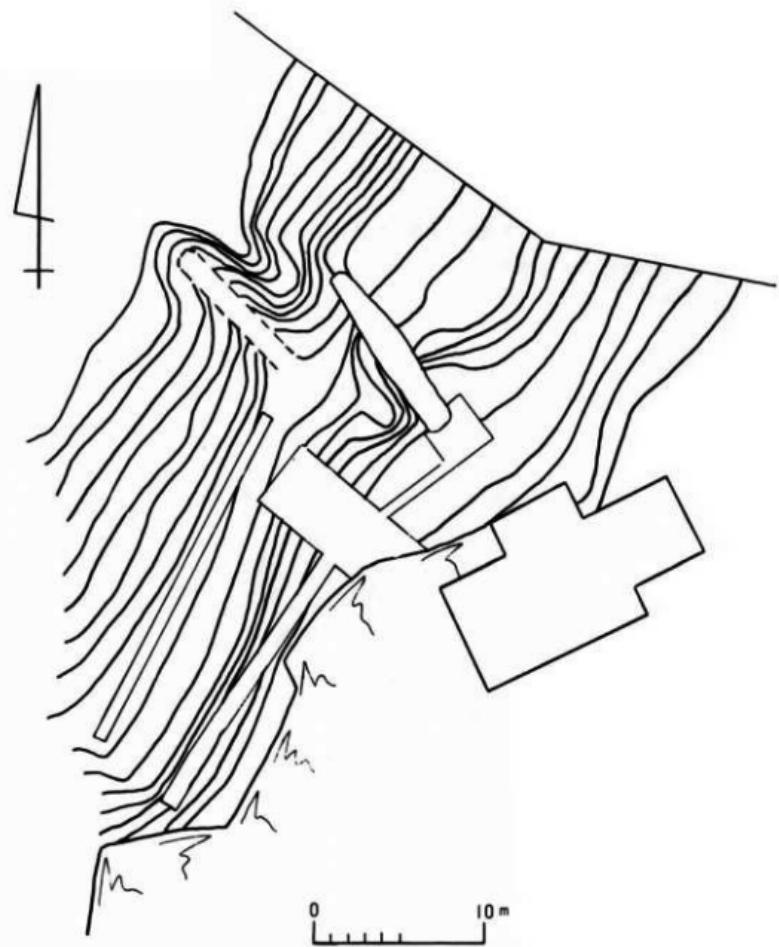
本窯は、二ッ梨町より戸津町に至る道路(南)に開口した小谷の左斜面奥に位置していて、南加賀古窯跡群に含まれる須恵器窯跡である。

南加賀古窯跡群は、古墳時代の須恵器窯に始まり、鎌倉時代瓷器窯で終息している一大窯跡群であるが、その形成されている丘陵の北東端に位置している戸津町とその周辺は、奈良時代～平安時代の窯跡が集中している地域である。



第1図 南加賀古窯跡群主要窯跡分布図

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1 戸津3・4(8)・9号窯跡   | 8 郡谷1号窯跡(鎌倉)     |
| 2 戸津5号窯跡(平安)      | 9 小天王谷古窯址群(鎌倉)   |
| 3 一貫山古窯址群(奈良末～平安) | 10 大天王谷古窯址群(鎌倉)  |
| 4 从岡山古窯址群         | 11 カミヤ古窯址群(鎌倉)   |
| 5 二ッ梨古窯址群(仮称)     | 12 桃の木山1号窯跡(古墳末) |
| 6 奥谷1号窯跡(平安末～鎌倉前) | 13 分枝古窯址群(古墳)    |
| 7 稲宮古窯跡群(奈良・中世)   |                  |



第2图 1:2000比例尺地形图

本古窯跡の存在する谷の入口右斜面には、昭和38年に発掘調査されたが窯体未確認の戸津3号窯が存在している。また、谷奥の右斜面には、一基の窯跡が確認されている。更に、南西には、地下式平窯の戸津1号窯、丘一つへだてた西側には、奈良時代末～平安時代初めの一貫山古窯跡群が存在していたが、現在はほとんど破壊消滅してしまった。その他に、山を越えた北東には、平安時代前期の戸津5号窯が存在する。

## II 既応の調査

1. 戸津町周辺で、土器が焼かれていたことは、相当早くから知られていた。しかし、その研究が始まったのは戦後になってからである。戸津で、昭和25年8月、高橋勝喜、上野与一両氏の指導のもと、松任高等学校郷土クラブが石川県で最初の須恵器窯跡の発掘調査を実施した(後述)。その時に、現在、戸津1号窯として残っている平窯の須恵器窯跡の調査も行なわれた。この窯跡は、窯体実測を目的に、昭和42年、小松市教育委員会の依頼で、上野与一氏の指導される北陸大谷高等学校地歴クラブが再調査を行なった。

昭和35年には、戸津地内で瓦が採集され、その窯跡確認調査が昭和38年に行なわれた。これが戸津3号窯である。この調査は、上野与一、岡下 梨両氏の指導で、北陸大谷高等学校地歴クラブ、小松高等学校地歴クラブ、片山津中学校郷土研究部が合同で行なった。位置は、戸津町より二ッ梨町に至る道路に開口した小谷の右斜面に所在し、戸津4号窯はこの谷の奥の左斜面に存在する。この調査では数本のトレンチを設定したが、窯体を確認することができなかった。しかし、瓦や多量の須恵器が出土し、戸津3号窯として呼称されていて、谷奥の4号窯の資料と一緒に処理で、北陸須恵器編年のなかの終焉期に位置付けられている。

昭和45年4月には、上野与一、岡下 梨、土井輝男氏の指導のもと、北陸大谷高等学校地歴クラブと小松工業高等学校地歴クラブにより、二ッ梨町通称一貫山の南西斜面で土砂採取とともに緊急発掘調査が実施された。この窯は、上下2層からなり、長さ9.9m、幅2.3m、傾斜角は約20度であった。

この調査の前後より、南加賀古窯跡群の形成されている丘陵は大規模な加賀温泉郷ゴルフ場造成により、多くの須恵器窯、加賀古窯等の重要な窯跡が不十分な調査のまま埋没してしまった。その後、この時の反省から、昭和48年の第二次ゴルフ場造成時には、分布調査と発掘調査を行い、協議の結果、現状保存されることとなった。

このような開発と保護の中で、昭和45年より、九谷古窯の調査で始まった石川県古窯跡調査5ヵ年計画の第四次事業として、昭和49年に戸津5号窯跡が調査された。全長約6m、幅約1.2m、傾斜角20～25度であり、一部が地上に露呈していた半地下式の登窯であった。

2. 今回、調査を行なった戸津9号窯は、昭和25年に松任高等学校郷土クラブが発掘調査を行なった戸津4号窯の下方に並行して築かれていて、昭和25年の調査の時に、一部発掘されたが、調

査半ばで放棄されていて、窯体の一部が露呈していた。今回の調査では、この戸津9号窯の完掘と戸津4号窯の灰原の一部の調査を行なった。9号窯については後述するので、ここでは昭和25年の戸津4号窯の概略を調査報告書を抜粋して述べたい。

「(窯は)のはり窯で傾斜は約30度前後、形は中ほどが腰み両端は狭くなっている。入口即ち火を焚く所は地滑や土地の変動でその形を明瞭に表わしていないが幅は180厘、高さは20厘前後で、もちろんこれは落盤の結果と思われる。発掘の時、このあたりから切石の破片が多く出た。これは或いは入口をかためていたものかも知れない。(略) 壁の中には今日の壁(あらかべ)に藁が切り込まれているようにこれも多く切り込まれてあった。この壁は上部へ行く程薄くなり手の平や指の跡があり、おそらく手で塗られたのではないかと思う。(略) 底はやや段状でありあまり複雑な窯ではなかった。」

この報告書や、現地の残存状態より考えると、全長は約10mぐらい、幅は最大で約2m、傾斜は約30度ぐらいで、ほぼ9号窯と同じ規模であり、報告書より考えると半地下式登窯であり、構築当初は、煙道部が一部地上に露呈していたと思われる。

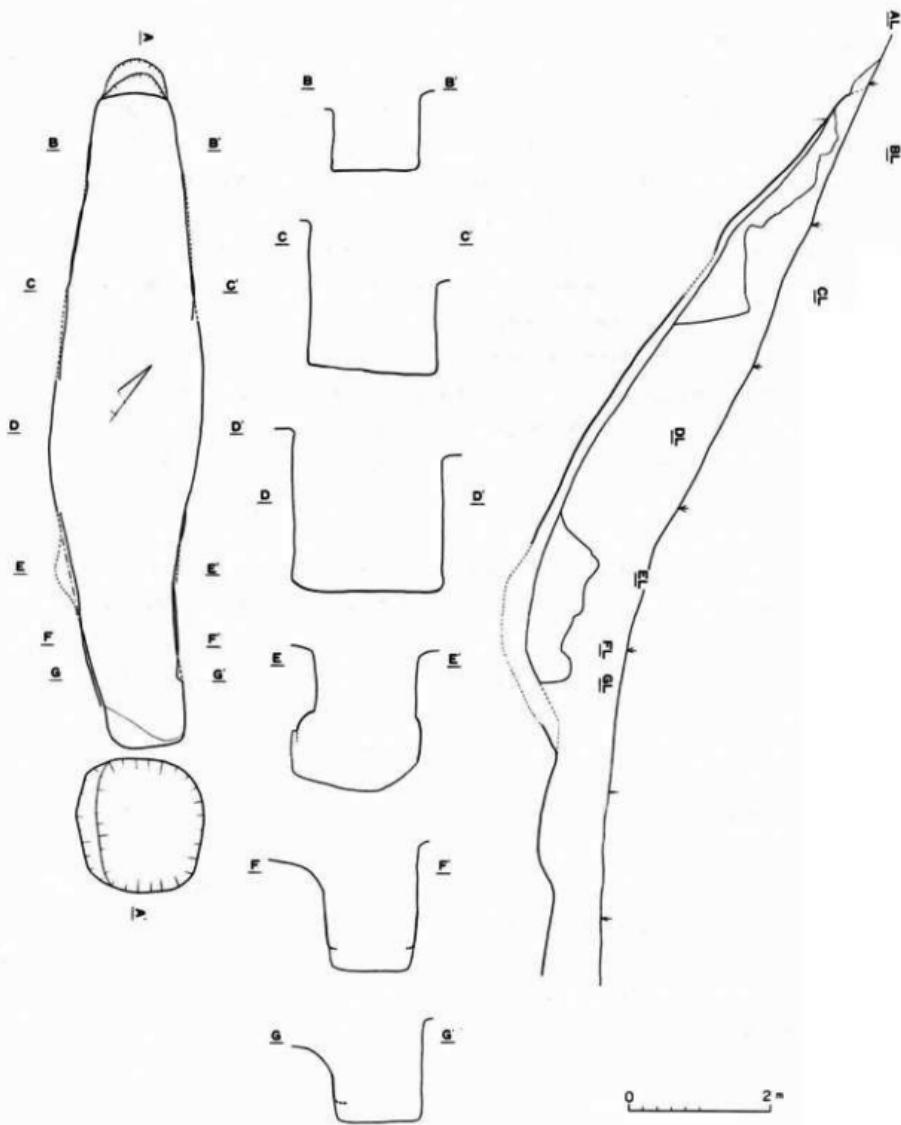
今回の調査では、この灰原の一部も発掘を行なった。この灰原の出土品を戸津8号窯として処理し、現在、県立郷土資料館保管の25年調査時の戸津4号窯の資料と区別して呼称した。つまり、戸津8号窯とは、窯跡の名称ではなく、従前からの戸津4号窯の灰原の遺物のことであり、混乱をさける意味で、ここで一応お断りをする次第である。

### III 調査経過

昭和50年3月、戸津町ヨ35番地の上田喜義氏は、氏の所有するブドウ園の機械化を推進するため、戦後の入植以来の段畑を平地化する構造改善事業を実施する計画を立てた。その地内に窯跡が存在するので、その旨を小松市教育委員会社会教育課へ届けた。社会教育課では直ちに現地へ行き、当該地には、昭和25年に発掘調査された窯2基、その東側の斜面に1基の窯跡が存在することを確認し、その取り扱いについて上田氏と協議した。

その結果、昭和50年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存を図ることに決定した。

発掘調査は7月7日より開始し、8月11日に終了した。谷奥の斜面全体にトレンチ法により試掘調査を行なったが、この地区には窯跡は存在しなかった。右斜面には1基存在するが、耕作中であり、当面の改善事業の対象外であるため、左斜面の昭和25年に調査された戸津4号窯の灰原の一部と、同年に一部調査され放置されていた戸津9号窯を完掘した。



第3図 戸津9号窓跡実測図

## IV 遺 墓

本9号窯は、前述のように昭和25年の「六字ヶ丘古窯」の調査で一部発掘調査されたが、調査半ばで放置されていて、遺存度はあまり良好ではなかった。

窯体は等高線に直交して構築されている。主軸方位はN-36°Wにとり、構築当初は煙道部が一部地上に露呈していたと思われる、半地下式登窯の部類に入るものであろう。全長9.3mを測り、幅は焼成部最大幅で2.1m、窯尻部で1.2mであった。焚口部、燃焼部は前回の調査で床面と壁の一部は欠失していたため、正確な数値を出せないが、複原すれば、幅は焚口部で1m、燃焼部では1.3mとなる。つまり、焼成部中央でやや胴の張ったプランを呈している。

窯床面の傾斜については、焚口部、燃焼部で壁の立ち上がりが残っていて、これは、主軸床面と傾斜はほぼ同じと思われる所以、この部位での窯床面の傾斜は約25度で下降し、燃焼部中央で最も深くなり、それより約15度の勾配で焼成部へ続いている。壁の立ち上がりで見るかぎり舟底状の凹みを呈している。焼成部下方では傾斜は25度を計るが、除々に傾斜を強め、中央では40度となり、そのまま窯尻部へ続いている。

側壁は、焚口部、燃焼部で60cm程残っていた。また、窯尻より約1mの地点に、30cmぐらいの幅で完全に天井がアーチ状に残存していて、高さは約60cmであった。しかし、調査途中に崩壊したため、正確な数値は測れなかった。燃焼部、焼成部下方でスサ入り粘土で数回の部分的な修復が見られた。

焼成室床面には、壺、碗、蓋類の遺物が検出された。また、床面の傾斜が強いため、焼壁や半球形の焼台を使用していた。

前庭部には、1.9m×1.8mのやや楕円形を呈する浅いピットが認められた。

## V 出土遺物

遺物は9号窯内及び前庭部より、蓋、壺、台付壺、皿、台付皿、碗、台付碗、鉢、甕、瓶類が出土した。そのうち、鉢、甕、瓶類は少量であり、前庭部よりの出土であった。

4号窯灰原より出土の遺物は、蓋、壺、台付壺、皿、台付皿、鉢、甕、瓶類と大別でき、9号窯と器種的に大差ないが、碗がわずか2点しか認められなかった。

### 9号窯出土遺物

#### 蓋（第4図1～17）

1～14は床面、15～17は前庭部よりの出土である。

1は口径25.5cm、高さ4.3cmの大型の蓋である。天井部外面に径10.2cmの壺の高台を思わせる突起をめぐらす。これよりなだらかに口縁に至っていて、端部は外に開いている。

2と4~8、15、16は口径14.2~15.1cm、高さ1.4~1.8cm、11、12、17は口径12.2~12.9cm、高さ0.9~1.6cmで大きさの違いがあるが、へんべいで、平坦な天井部を形作っているものである。

3、9、10は口径13.6~14.4cm、高さ1.9~2.3cm、13、14は口径12.8~11.5cm、高さは2.1~2.0cmで、両者共に天井よりなだらかに口縁に至っている。

#### 杯（第4図18~40）

18~27、30~38は床面、28、29、39、40は前庭部の出土である。高台の付くものと付かないものがある。

18~29は高台の付かないものである。手法上はまったく同じであり、底部はヘラケズリを行ない、内外面とも回転ナデ調整を行なっているが、不十分であるため粘土紐の凹凸が残るものが多い。27の底部は未調整である。口径は12.1~13.3cm、高さは2.7~3.1cmである。

30~33は口径11.3~12.3cm、高さは3.2~4.2cmと口径に比して器高が高いものである。手法はほとんど同じで、回転ナデ調整を行なっている。底部はやや肥厚している。

34~40は高台の付くものである。34~38の底部高台内はヘラケズリのちナデ調整を行なっている。口径13.3~13.8cm、高さ6.3~6.7cmである。39、40は欠けているため口径、高さは不明であるが、手法は同じである。

#### 碗（第4図41、42、第5図43~57）

41~49、51~54は床面、50、55~57は前庭部の出土。高台付きと付かないものがある。

46、48、50は欠けているため大きさは不明であるが、41~45、47、49は口径13.2~13.7cm、高さ3.8~4.2cmである。42と45~50は底部糸切りであり、41と43、44は糸切りのちヘラケズリ調整を行なっている。その他の手法は同一である。ミズビキ成形を行ない、内外面とも入念に回転ナデ調整を行なっていて、体部下方は底部までヘラケズリを行なっている。

51~57の台付碗では、51のみ口径13.4cm、高さ4.9cmであとは欠けている。55は糸切り未調整で、51、52、54、56は糸切りのちヘラケズリ調整を行なっている。53と57はヘラケズリ調整を行なっているが、糸切りであるかは不明。他の手法は高台の付かない碗と同一である。

#### 皿（第5図58~78）

58~62、68~74は床面、63~67、75~78は前庭部の出土。高台付きと付かないものがある。

58~67は高台の付かないもので、口径は13.6~16.1cm、高さは1.6~2.4cmである。底部はヘラケズリ、そののち一部ナデ調整を行なっている。内外面とも回転ナデ調整を行なっている。高さに比して底部は肥厚している。

台付きの68~78のうち、74と78は欠けていて不明であるが、口径12.9~13.8cm、高さ2.0~3.1cmである。底部は68と69は糸切りで未調整、71、73、76、78は糸切りのちヘラケズリ、72、77は糸切りのちヘラミガキ調整を行なっている。70はヘラケズリであるが、糸切りかは不明。内外面の手法は70、72、73はハケナデ調整、他は入念なヨコナデ調整を行なっている。

#### その他（第6図107~117）

107、108は瓶の底部である。107は台付环の底部が付いている。

109は長頸瓶の部分である。9号窯の床面よりこれ1点のみの出土である。

115、116と117は種類が違うが鉢である。3点ともヨコナデ調整が入念である。

#### 4(8)号窯灰原出土遺物

##### 蓋（第5図79～83）

79～81は口径14.9cm、高さ1.8～2.0cm、82と83は口径11.9cm、高さは1.5・1.6cmで、形の大小はあるが、へんべいで、平坦な天井部を形作っている。内外面とも入念なナデ調整を行なっている。79は口縁端部が内側に屈曲している。

##### 环（第5図84、85、第6図86～93）

84～88は高台の付かない环である。口径13.3～14.6cm、高さ2.6～3.5cmである。底部はヘラケズリを行なっている。内外面とも回転ナデ調整を行なっているが、不十分であるため一部に粘土紐のラセンが残っているものもある。

89は口径14.4cm、高さ3.8cmの小型の环である。底部は糸切りで、内外面とも入念な回転ナデ調整を行なっていて、体部下方底部付近はヘラケズリを行なっている。

90～93は台付环である。90は口径14.4cm、高さは5.0cmで、他は欠けているため不明である。底部はヘラケズリを行なっていて、高台近くはナデ調整を行なっている。内外面とも入念な回転ナデ調整を行なっている。

##### 碗（第6図94、95）

碗はこの2点のみ検出された。94は糸切りを行なっている。95はヘラケズリを行なっているが、糸切りかどうかは不明である。

##### 皿（第6図96～106）

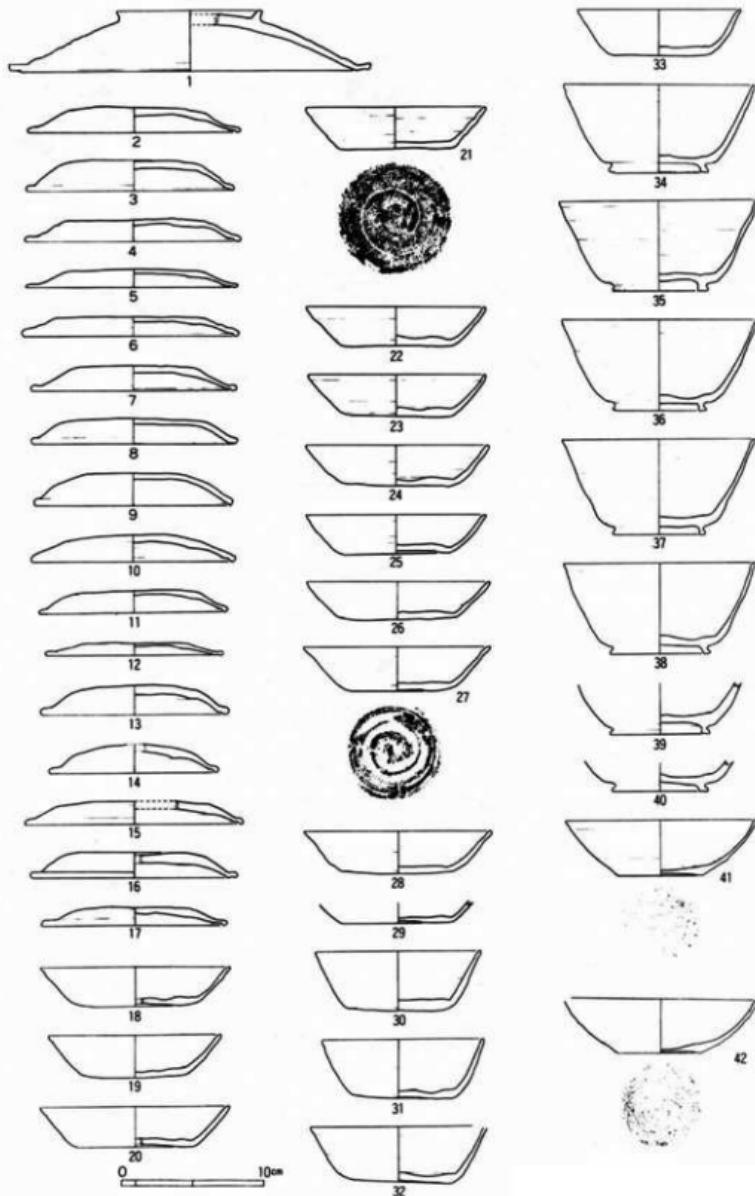
96～101は高台の付かないものである。96～99は口径13.6～15.6cm、高さ1.8～2.4cmである。底部はヘラケズリのうち一部ナデ調整を行なっている。内外面とも回転ナデ調整を行なっている。

100、101は高台が付いていないが、台付皿と同じ形態である。口径13.8、13.2cm、高さ2.6、2.7cmである。糸切りのうちヘラケズリを行なっている。

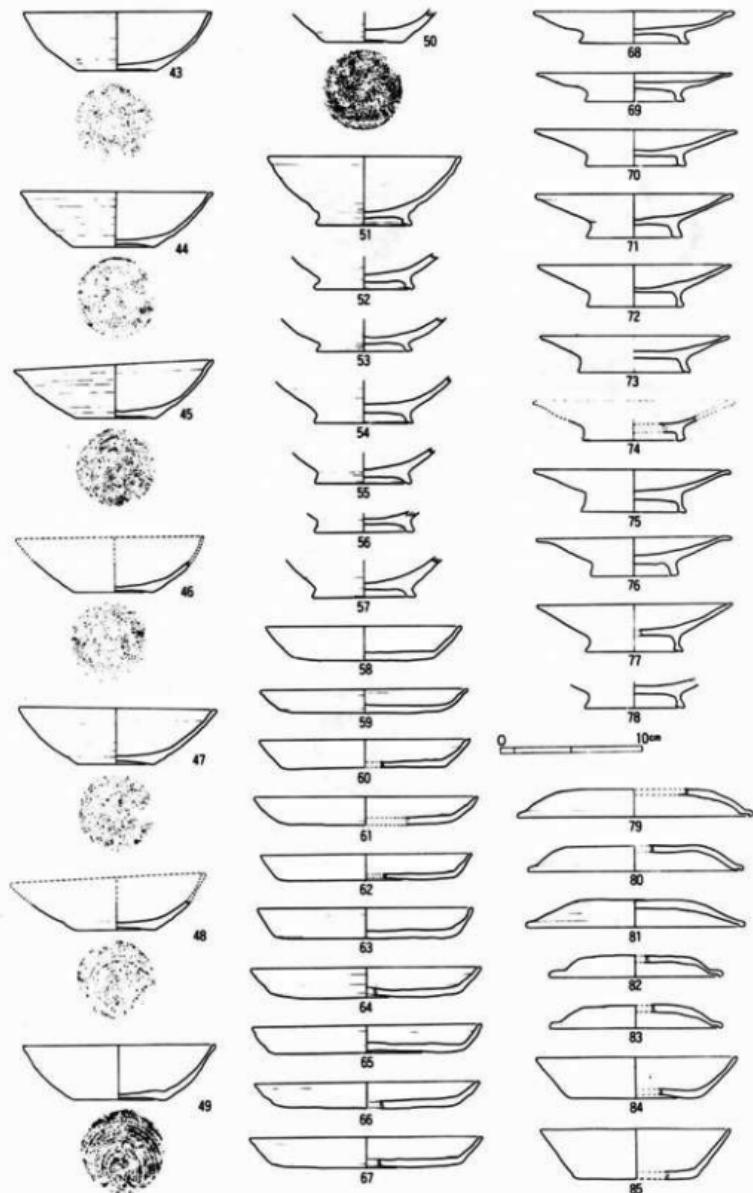
102～103は台付皿で、口径12.9～14.0cm、高さ3.0～3.5cmであり、105、106は不明である。104はヘラケズリであり、糸切りか不明、他は糸切りのうちヘラケズリを行なっている。100～106までは他の手法は同じで、内外面とも回転ナデ調整は入念である。

##### その他（第7図118～129、第8図132～134）

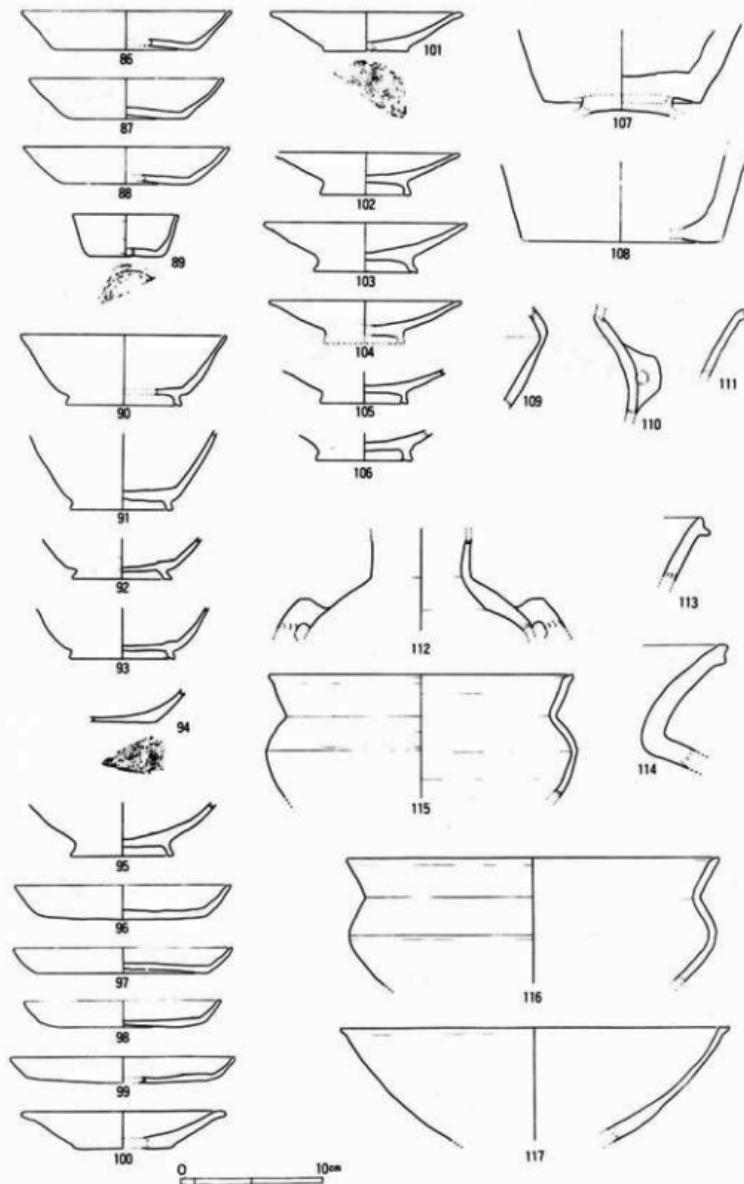
118、129は形態はちがうが鉢である。119、120は長頸瓶、121、123～126は双耳瓶である。122は底部のみで形態は不明であるが糸切り底である。132～134は窯の口縁部である。



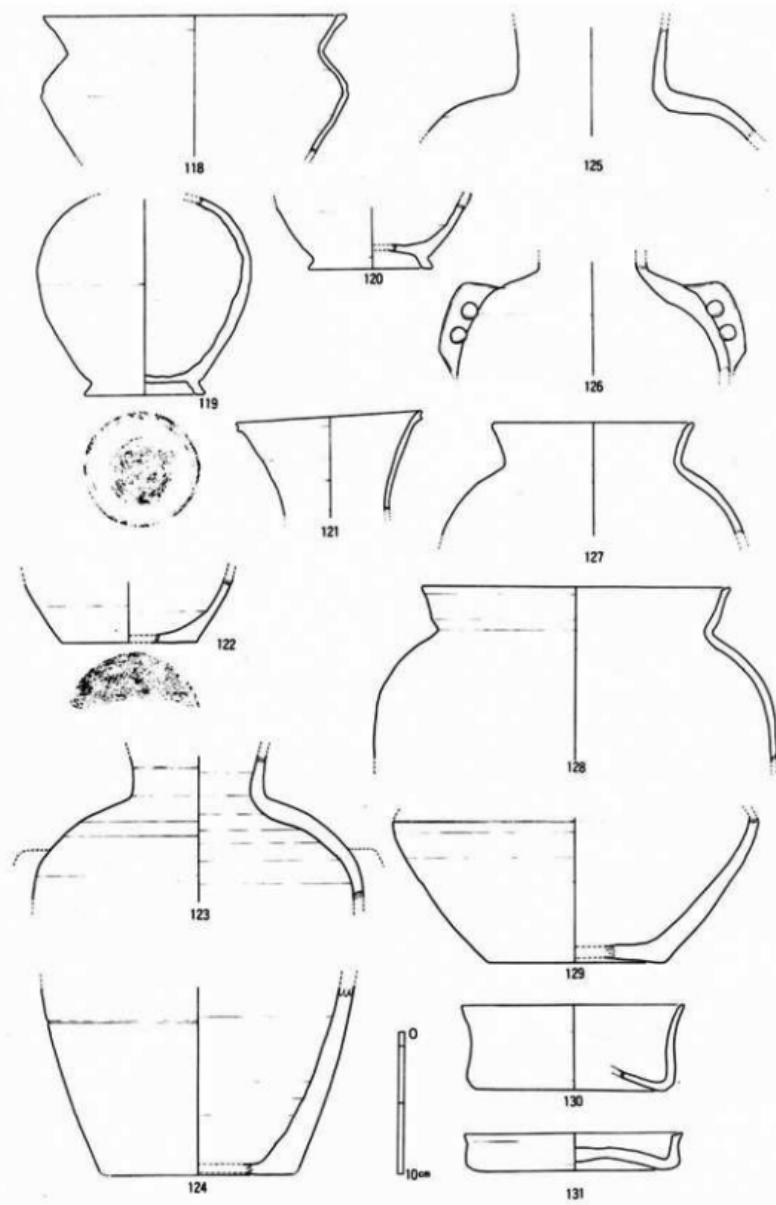
第4図 出土遺物実測図



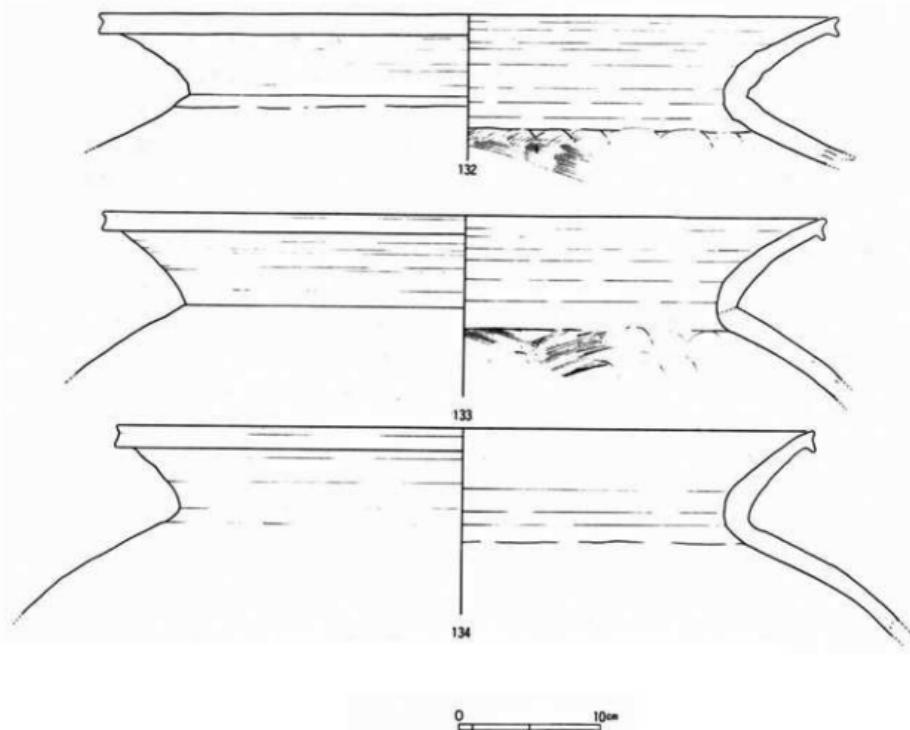
第5図 出土遺物実測図



第6図 出土遺物実測図



第7図 出土遺物実測図



第8図 出土遺物実測図

## VI 戸津古窯址群の考古地磁気測定

広岡公夫

〈はじめに〉

古窯の年代推定の有力な方法の一つとして、考古地磁気法がある。窯体の焼土はそれに含まれる磁性鉱物の熱残留磁化として、最後に窯の火をおとした時の地磁気を記録している。地磁気は長い年月の間にその方向を変えていく。これを地磁気変年変化という。窯体の残留磁化方向も、

この永年変化と平行して窯の時代によって異なるものになる。過去 2000 年間の西南日本の永年変化の大略が明らかになっているので<sup>1)</sup>、窯体から得た焼土試料の磁化方向の測定結果をこの地磁気永年変化曲線にのせてやると、考古地磁気学的に年代を推定することができる。最初に永年変化曲線を作る時に、窯やその他の遺跡の考古編年も用いているので、その意味では完全に考古学と独立には年代をきめることはできないことになるが、一旦、曲線が定まれば、遺跡の種類にかかわらず、また考古編年とは独立に焼土の磁化方向の類似性から年代の推定ができる。更に、地磁気の偏角・伏角の変化は過去 2000 年間を通じて、4~500 年の周期性がみられるので、<sup>14</sup>C その他の年代測定法のように若い時代のものの精度が落ちるということがない利点がある。ただ、偏角変化と伏角変化の組合せで、時代によって地磁気の方向変化の小さい時期があり、その時代に当る場合には推定年代巾が大きくなる。過去 2000 年間には、同じ地磁気方向を示す時が何度があるので、時代を推定する手がかりの全くない遺跡の場合には、一義的には年代がきまらず、複数の年代推定値のいずれか判別できないこともある。例えば、西暦 2、3、4 世紀と、12、13、14 世紀はそれぞれ非常によく似た地磁気の方向を示していたし、6 世紀前半と、9、10 世紀も殆んど区別がつかない。

#### 〈試料の採取〉

考古地磁気測定のための焼土試料は、戸津 5 号窯と 9 号窯から採取した。

5 号窯は窯体の中央部より少し焚口に近い部分の割合狭い面積から 14 号の試料を得た(試料番号 K T 101~114)。試料の磁化方向を知るために、試料として採取した焼土が、遺跡中でどのような方位をとっていたかが分っていなければならぬので、常に、考古地磁気測定では、遺跡で方位をつけた定方位試料を必要とする。その方位を測るのに通常、最も簡便な磁針(コンパス)を用いるので、遺跡のある場所の磁北が真北からずれている角度、即ち、現在の地磁気偏角が問題となる。磁北のずれを知るために、5 号窯ではトランシットによる太陽の方位観測を行なった。太陽の真北を基準にした方位は、観測点の緯度・経度と、その時刻が分かれれば理科年表や天体位置表にある数値を用いて、計算によって求めることができる。トランシットによって、磁北を基準にして、ある時刻の太陽の方位を観測し、その時刻の真北からの方位を計算によって求める。観測値と計算値の差が即ち真北と磁北の差となって出てくる。こうして、試料採取地点の偏角を求め、残留磁化方向の測定結果の補正に用いる。今回は 5 回の太陽方位観測を行なって、8.28 の値をえたので、この値で測定データーを補正し、5 号窯使用時の考古地磁気偏角を求めた。

9 号窯ではなるべく窯体の各部にわたるように配慮して 22 個の試料を採取した。試料採取が大方になり、あいにく雲もあったので、トランシットによる偏角決定は出来なかつたが、5 号窯と地理的にそんなに離れてなく、偏角も異なるとは考えられないで 5 号窯で得た値を補正に用いた。

〈考古地磁気測定結果〉

戸津5号窯の個々の試料の考古地磁気測定結果は第1表に、9号窯の結果は第2表にそれぞれ示されている。

第1表 戸津5号窯の残留磁化測定結果

試料番号	偏角	伏角	試料番号	偏角	伏角
K T 101	- 20.69°	47.92°	108	- 14.11°	52.37°
102	- 17.45	46.49	109	- 18.02	48.38
103	- 24.62	50.93	110	- 15.24	52.04
104	- 18.60	43.77	111	1.27	41.11
105	- 6.58	43.65	112	- 13.12	42.03
106	- 10.87	52.73	113	- 13.61	45.68
107	- 14.43	47.97	114	- 10.29	48.00

偏角は東偏を正、西偏を負で表す。

第2表 戸津9号窯の残留磁化測定結果

試料番号	偏角	伏角	試料番号	偏角	伏角
K T 121	- 9.22°	45.52°	132	- 15.74°	49.00°
122	- 12.77	48.93	133	- 20.15	50.19
123	- 14.48	48.51	134	- 10.60	49.42
124	- 18.06	47.73	135	- 13.50	48.76
125	- 14.06	51.63	136	- 9.76	47.83
126	- 0.71	48.13	137	- 14.12	50.74
127	- 20.79	50.10	138	- 11.68	48.98
128	- 18.46	48.33	139	- 23.21	47.52
129	- 7.16	47.56	140	- 1.99	45.23
130	- 14.80	47.81	141	- 9.70	46.37
131	- 14.81	49.72	142	1.87	33.33

偏角は東偏を正、西偏を負で表す。

また、5号、9号両窯の測定値から求めた平均偏角、平均伏角とともに、その誤差の大きさが $\alpha_{ss}$ として第3表に示されている。表中、 $\alpha_{ss}$ はフィッシャーの信頼角<sup>(3)</sup>で、個々の試料の磁化方向のバラつきの大きさから計算される誤差の大きさで、95%の確率で、求めた平均偏角・伏角がおさまる範囲を示している。

第3表 戸津5号窯および9号窯の考古地磁気測定結果

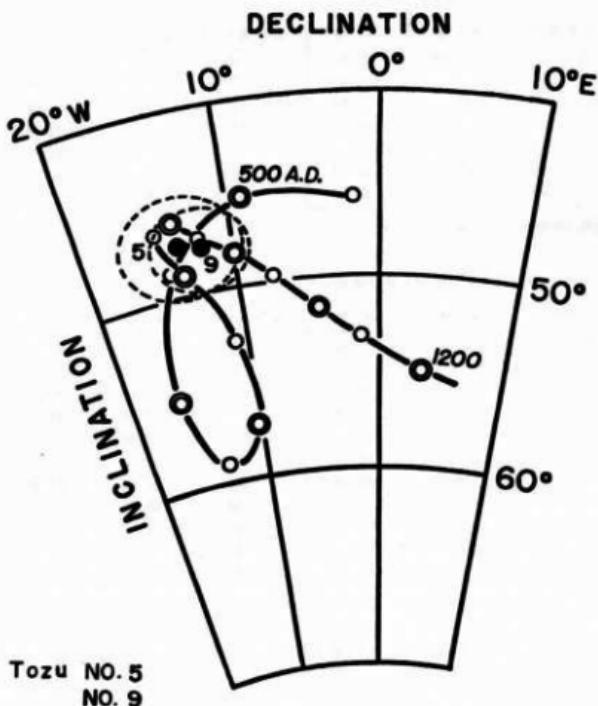
窯名	測定試料数	平均偏角	平均伏角	フィッシャーの信頼角( $\alpha_{ss}$ )
戸津5号	14個	- 13.90°	47.53°	2.86°
戸津9号	22個	- 12.22°	47.98°	2.17°

平均偏角は西偏を負で表す。

〈考 察〉

戸津5号窯は考古学的には平安時代前期と考えられるが<sup>(3)</sup>、考古地磁気学的には、8世紀末～10

世紀末までは、偏角・伏角の変化が極めて少ない時代で、その 200 年間の差は磁化方向から分けることは殆んどできない時期にあたっている。第 1 図は A.D.450 年から A.D.1200 年までの地磁気水年変化曲線と、戸津 5 号、9 号窯の測定結果が示されている。二重丸は各 100 年毎の、また一重



第 1 図 戸津 5 号窯および 9 号窯の考古地磁気測定結果と西南日本の地磁気水年変化  
黒丸 5 : 戸津 5 号窯 黒丸 9 : 戸津 9 号窯

丸は各世紀半ば (50 年) の偏角・伏角を表し、黒丸が戸津 5 号と 9 号の平均磁化方向を示している。それぞれの黒丸を囲む破線の楕円はフィッシャーの信頼角 ( $\alpha_{ss}$ ) の範囲を示す。図から分るように、 $\alpha_{ss}$  の楕円の大きさは、5 号、9 号共に 8 世紀末から 10 世紀全体をおおっており、考古地磁気推定年代もこの範囲に入る年代、即ち、780 年～1000 年のいつであってもよいことになる。また、5 号と 9 号の黒丸が互に相手の楕円の中に含まれているので、考古地磁気学的には殆んど有意の差はない、年代的にも同じと考えなければならない。しかし、強いて、もっと細かく年代を見ようとするならば、5 号窯は西暦 830 年頃が最も確率が高く、9 号窯は 960 年頃が最も可能性が高いといえよう。

#### （引　用　文　獻）

- 1) Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan. Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., 38, 167-207.
- 2) Fisher, R.A. (1953) Dispersion on a sphere. Proc. Roy. Astr. Soc. London, 27, A, 295-305.
- 3) 小村茂 (1975) 「戸津 5 号窯跡」—石川県古窯跡調査（第4次）概報—石川県教育委員会。

#### 追　記

小松市戸津第5号窯および9号窯の熱残留磁気測定は、特定研究“自然科学の手法による遺跡・古代文化財等の研究。（昭和52年度）「古陶磁の年代決定に関する研究」班（北陸地区担当：廣岡公夫・吉岡康暢）の作業の一部である。

#### VII　まとめ

戸津9号窯は、南加賀古窯跡群の最東端ブロックに属する須恵器窯跡である。その構造は、煙道部が一部地上に露呈していたと思われる、半地下式登窓と考えられる窯跡であった。全長9.3m、最大幅2.1mを測り、床面の傾斜は焼成部中央で約40度の強いものであった。部分的には数度の修復が認められたが、大幅な改造は行なわれていなかった。

戸津4(8)号窯の規模は、報告書及び現地の残存状況より考え合わせると、全長約10m、幅約2mとほぼ同じ大きさであり、傾斜は約30度であった。この9号窯、4号窯の数値は、奈良時代後期に比定されている二ッ型一貫山1-II号窯の全長10m、幅2.3mとほぼ同じである。この時期にやや広大な窯を築いているが、その後の、平安時代前期後半の戸津5号窯では、全長6m、最大幅1mと窯規模が縮小するようになる。本9号窯、4号窯になると、また、比較的広大な窯に戻っている。しかし、窯が集中して築かれていたものが、除々に減少し、分散されて来て、この9号窯では、同時期に単独かあるいは2基程度になっている。

南加賀古窯跡群の形成されている丘陵では、平安時代に属する窯は東北端の戸津町付近に集中していて、中でも下降する窯は、この「六字ヶ丘」周辺に限定されて来るようになる。

戸津9号窯の窯内及び前庭部より出土した須恵器は、蓋、环、台付环、皿、台付皿、碗、台付碗、鉢、甕、瓶類に分けられる。後体的には、蓋、环、皿が量的に多く、次いで碗類となっていて、鉢、甕、瓶類は極めて少量で、前庭部よりの出土であった。これは、灰原の調査を行なっていないために限定は出来ない。蓋には鉢がなく、碗、台付皿に限って底部糸切り技法が用いられていて、その中で、碗底部の糸切痕を再調整しているものもみられた。

4(8)号窯灰原の遺物は、9号窯とは器形的に同じであるが、床面出土のやや深い环（第4図30~33）が見られなかった。また、碗がわずか2点しか認められなかつたことは疑問の残るところであり、灰原の一部の発掘であるため、今後の精査、検討を待ちたい。

ところで、この4(8)号窯灰原出土の遺物と、昭和25年の調査時出土の遺物（石川県立郷土資料館保管、『加賀三浦遺跡の研究』——石川県教育委員会・松任町教育委員会 昭和42年3月発行——所収）と比べると、器形に相違がみられる。つまり、郷土資料館保管の戸津4号窯の資料の中の、台付环や蓋等に年代のバラツキがみられることである。このことは、小松市立博物館保管の戸津3号窯の資料（昭和38年の調査時出土）にも当てはまるのである。おそらく、当時、付近の分布調査等を行ない、その時に採集した資料も混ざったものと思われる。それは、報告書にも土器採集に行ったことが書かれていることからよりも考えることができる。そうすれば、今後は今回の灰原の資料を戸津4号窯として考え、それをもって以前の資料の見なおしが可能であろう。

以上、概略を記したが、戸津9号窯の操業年代を推論すると、4号窯よりもやや古い時期を考えることができ、平安時代中期（10世紀中頃）に比定したい。また、今回の4号窯の灰原の資料と、昭和38年の戸津3号窯の資料と比較すると、若干の相違が認められ、ここでは、戸津9号窯→戸津4号窯→戸津3号窯（10世紀後半）と考えたい。しかし、時間的な差違はわずかであり、また、前述のようにこれらの窯は、同一の小谷に存在していて、須恵器生産の終焉地はこの谷あるいは、付近に間違いがないと思われる。

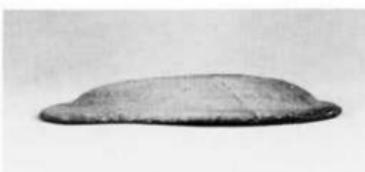


戸津9号窯

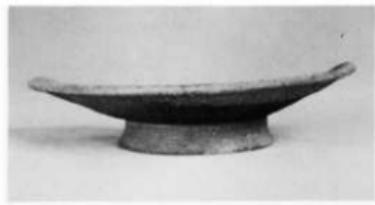
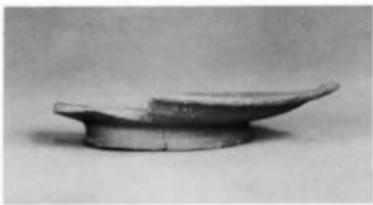
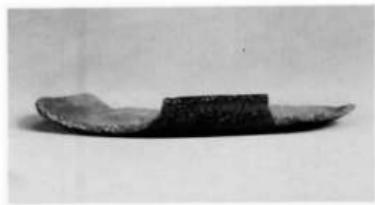


窯尻より

図版 III 遺物 戸津9号窯



図版 IV 遺物 戸津9号窯

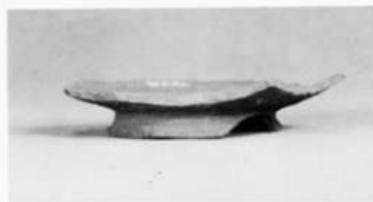
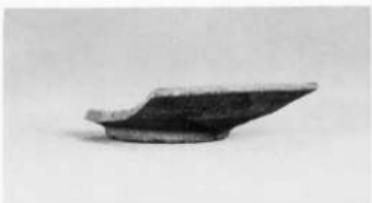


図版 V 遺物 戸津9号窯

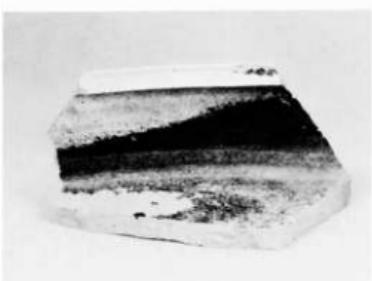




図版 VII 遺物 戸津8号窯



図版 VIII 遺物 戸津8号窯



小松市文化財調査報告 第5輯

戸津9号窯跡

構造改善事業に伴なう発掘調査概報

昭和55年3月20日 印刷

昭和55年3月30日 発行

発行所 小松市教育委員会

印刷所 英文堂印刷株式会社